橘の歌一首　并せて短歌

四一一一番

かけまくも　あやに恐し　天皇の　神の大御代に
田道間守　常世に渡り　八矛持ち　参ゐ出来し時　時じく
の　かくの菓実を　恐くも　残したまへれ　国も狭に
生ひ立ち栄え　春されば　孫枝萌いつつ　ほととぎす　鳴
く五月には　初花を　枝に手折りて　娘子らに　つとにも
遣りみ　白たへの　袖にも扱入れ　かぐはしみ　置きて枯
らしみ　あゆる実は　玉に貫きつつ　手に巻きて　見れど
も飽かず　秋付けば　しぐれの雨降り　あしひきの　山の
木末は　紅に　にほひ散れども　橘の　成れるその実は
ひた照りに　いや見が欲しく　み雪降る　冬に至れば　霜
置けども　その葉も枯れず　常磐なす　いやさかばえに
然れこそ　神の御代より　宜しなへ　この橘を　時じくの
かくの菓実と　名付けけらしも

反歌一首

四一一二番

橘は　花にも実にも　見つれども　いや時じくに　なほ
し見が欲し